サントリー清宮監督のW杯チェック（新聞掲載）の感想

まず、基本的な 2 つの視点から合格点を与えています。

1.［身体をはったタックルは 92% 近い成功率］
　2〜3 人でくらいつくことより one for one の意識と技術が大切です。
2.［反則が非常に少ないディシプリン discipline が行き届いた防御］
　反則が少ないということは根本的に大切なことです。
　disciplune というラグビー憲章（Playing Chart）の言葉を使っての評価は適切なものです。
　タックルで言うならば courage を評価していることです。

それから、
［キックで地域を進める戦術は間違いではないが技術が足りなかった］
タッチキックは、状況（地域位置、試合の流れ、双方の態勢、天候、時間帯、キッカーの左右の正確さも含めたキック力）により間違いではないが、タッチキックで相手陣地に入ってそれから攻めると安易に決め込むことは間違いです。過去の W 杯でイングランドがこの方法で勝ち残っていった時、それは望ましいことではないという声が高くなり、決勝はこの戦術をとらなかったという事実があります。合法的であるとしても、唯一で最高の選択としてタッチキックをする判断力と確かなキック力が求められるのです。

［根本とかスタンダード］という大切なことが、古いとか固いという言葉のもとに問題にされないのが残念ながら現状です。

［試合をコントローメできるハーフ団の養成］の必要性は、まさに根本とスタンダードの認識不足が原因と言わざるを得ません。
スクラムハーフはスタンドオフへのパスマシンであることが精一杯で、スタンドオフは離れて立っているプレーヤーというだけで、良い位置取りとよいコース選択の感覚に乏しくて、両ハーフ一体となってのボール処理という意識と技術は未熟です。今日も二度と不世出のハーフ団として語り継がれているオールブラックスのレードローとカートンのハーフ団のフレキシブルで自然に流れるような動きを思い出すことができます。

［5 人の仕事量が多かった］
スクラムを特に重視する選考の結果として、よく動かない選手がいるから全体の運動量が減るのです。動かないのは、ゲームを知らない・動けない選手を作り出してしまったからです。スクラム、ラック、モールをはじめタックルの後など、スタート・コース・スピードの 3 点に留意して十分且つ完全に走っている選手が少ないという状況に対し、積極的に分析比較されていないというのが現状です。接点とスクラムだけでは国内で通用しても、世界のラグビーとは太刀打ちできません。

最後のトライ 未来へ光

W杯チェック 清宮克幸

熱い試合だった。ラグビーをやっている人間として誇りに思った。日本ラグビー界の代表としてのプライドをしっかり示してくれた。

FWが劣勢の中、よくしのいだ。身体をはったタックルは92%近い成功率で、反則が非常に少ないディシプリン（規律）が行き届いた防御をした。これは評価できる。

一方、攻撃は満足できない。日本らしい攻めはラスト3分くらい。地域をうまくコントロールできなかったことが大きな理由だ。キックで地域を進める戦術は間違いではないが、技術が足りなかった。イングランド代表でキックの名手のウィルキンソンを指導したキッキングコーチを（サントリーは）招いているが、日本の選手はキックをどうつなげればいいかという根本を理解していないという。そういうスタンダードを日本に広める必要がある。

日本はキックだけでなくパスでもハーフ団で試合をコントロールできなかった。FWが弱くても球を生かせるハーフ団が欲しい。国内では重視されないキックだが、これをうまく使った試合ができる存在感のあるスタンドオフをトップリーグで育てなければならない。

また、今回の代表は西浦、大野、トンプソンとFW前5人の仕事量が非常に多かった。トップリーグでも、前5人はスクラムだけ組んでいれば良いという一昔前の考え方を変えていきたい。

攻撃面は進歩が期待できる伸びしろだと思って良い。光明は最後のトライ。安全にFWの近場を右に左にボールを動かして奪った。未来につながるプレーだった。

きよみや・かつゆき　サントリー監督。母校を復活させた早大監督時代は9季で3度の全国大学選手権優勝。昨季、現場に戻ると前季はトップリーグ6位だったチームを準優勝まで引き上げた。

朝日新聞　2007 年 9 月 27 日朝刊より転載

2007.10.21
西川　義行